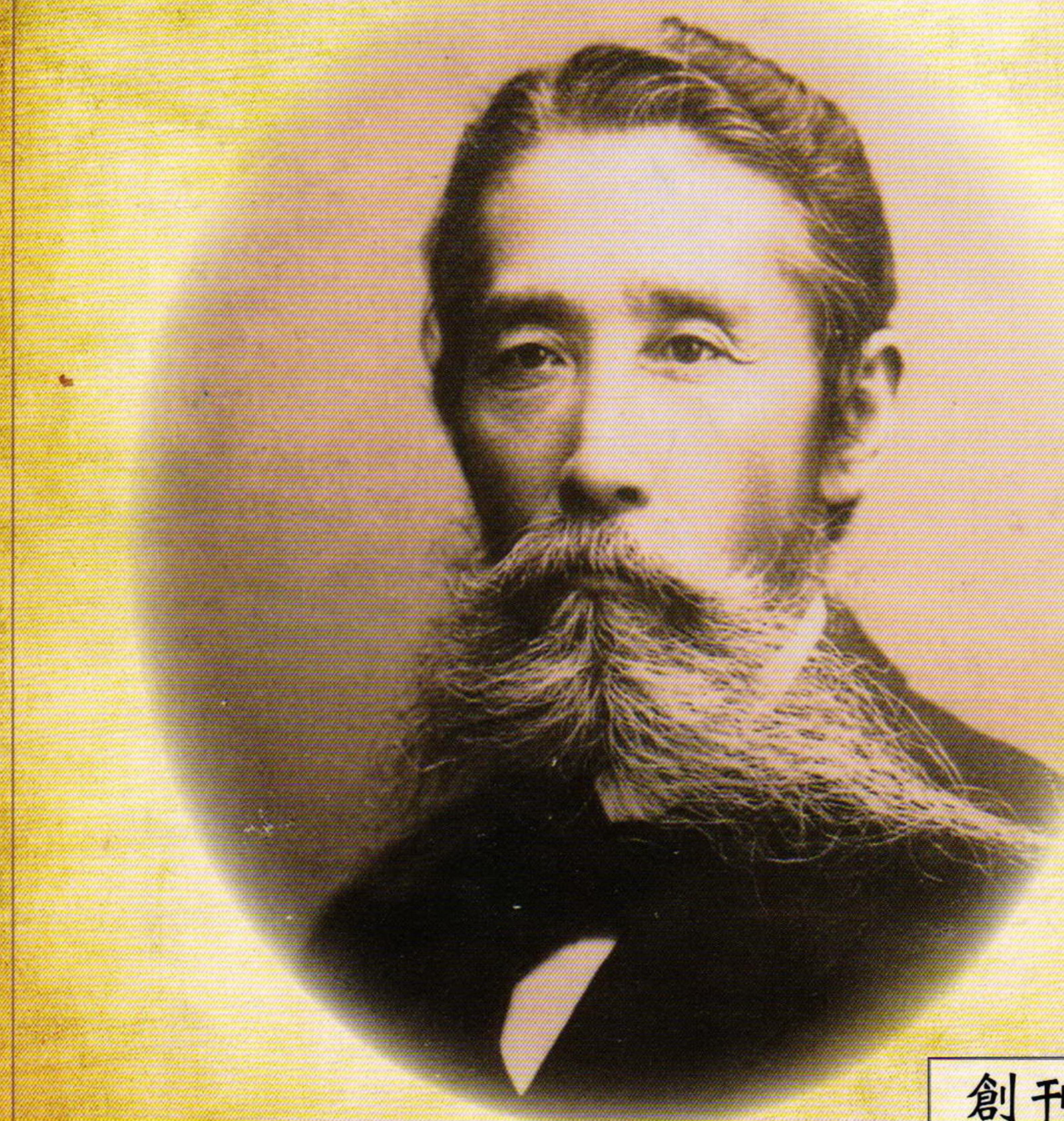


会報

# 板垣會



創刊号

## ごあいさつ

特定非営利活動法人 板垣会理事長 古谷 俊夫



「板垣死すとも自由は死せず」の名言を残した板垣退助伯が、大正八（一九一九）年没して後、その功績を称えようと銅像建設運動が澎湃として起り、大正十二（一九二三）年、高知城追手門内に板垣銅像が建設された。この運動を機に「財団法人板垣伯銅像建設同志会」が認可され、今日の板垣会の基が出来た。

戦時中、敗戦の色濃くなるや、銅像は供出され、誕生地・高野寺に建設された板垣会館も空襲によって全焼した。にもかかわらず、建設同志会は保存会、さらに財団法人板垣会と改称して存続し、戦後も会の目的を板垣伯の「遺徳を顕彰し自由民権思想の拡充徹底に務め民主的文化国家実現に寄与する」と改めて活動を続けた。

この後、板垣会のシンボルとしての銅像は、昭和三十一（一九五六）年に再建を果たした。自由民権を叫ぶ雄姿は、今日に至るまで人々の心に強く訴え続けているが、年月を経て損傷が甚だしいものとなつたため、本会は団体・個人の浄財を募つて修復の上、平成二（一九九〇）年、これを高知県に寄贈した。

また、本会は、高知インター近くの板垣山に眠る板垣伯一族の墓地の清掃、整備に努め、命日の七月十六日には毎年、高野寺で法事を主催している。

平成二十（二〇〇八）年、公益法人に関する法改正が行われ、基本財産が二百万円以下の板垣会は解散に向けて検討せざるを得なくなつたが、特定非営利法人となれば残余財産の引き継ぎが可能とわかり、理事全員の承認を経て、平成二十五（二〇一三）年七月八日、NPO法人板垣会の認可を得た。会の目的は同一であるが、「板垣伯の精神を今後の民主国家建設のため今日の若い青少年に伝え活動する事が大切である」という設立趣旨書に基づき、定款に諸事業を具体的に列記して再スタートした。

今回の会報発行も事業のひとつであり、今後、定期的に毎年刊行したい。また会員の増強をはかり、活動を活発化し、坂本龍馬に匹敵する評価を得たいものである。

# 板垣退助の復姓と乾家

板垣退助子孫 高岡 功太郎



財団法人板垣会の創立百年を目前に、NPO法人板垣会へと生まれ変わり、発足より百年継承されてきた、板垣退助を顕彰する思いが後世に引継がれることを期待して止みません。

私の母方の曾祖父・乾正士は、慶應四年三月二十五日の生まれで、板垣退助の嫡男鉢太郎とは同年の生まれになります。祖父乾一郎の話によれば、正士は、鉢太郎さんより二ヶ月ほど早く生まれましたが、嫡男の鉢太郎さんを憚つて次男と称したとのことです。兵学を好んだ退助は、長女には「兵」、次女には「軍」、長男には「鉢」、次男には「士」という風に戊辰戦争の前後に生まれた子には、「武運長久」を祈念してみな軍事を連想させるような名をつけたとのことです。退助にはその後、他にも男の子が生まれて、板垣家内では、孫三郎が三男、正實が四男、六一が五男と呼ばれていたとのことです。高知から移して今は大阪の五月山に建つ乾正士の墓

には「板垣退助次男」と彫られており、高知市薊野の板垣（乾）家歴代墓所にある板垣孫三郎の墓には「板垣退助三男」、さらに東京品川神社裏（旧高源院塋域）の墓所にある板垣正實の墓には「退助四男」、板垣六一の墓には「退助五男」とそれぞれ彫られております。退助にはその他にも、兵（片岡光房の妻）、軍（宮地茂春の妻）、婉（小川眞の妻）、千代子（二代目・浅野総一郎の妻）、良子（小山鞠絵の妻）の五人の娘がいたそうです。

祖父の話によると、乾家の系譜上の先祖は、甲斐武田家の親族衆・板垣信方（駿河守）という武将で、信方が信州上田原で討死したあと、嫡子の信憲（弥次郎）が後を継いだが、信憲は武士にあるまじき怠惰な行いがあり、ついに信玄公の勘気を被つて改易され、信方の娘婿の於曾左京亮に板垣の遺跡を継がせた。信憲には息子が二人いて、長男の正信（加兵衛）は、平素武芸の鍛錬を怠らず、のちに遠州掛川で山内豊公に仕えたと

のことです。板垣退助の伝記等では、この一豊公に仕えた頃に、家老の乾和三から親族衆として待遇されて「乾」と氏を改めたという話が載っています。一方で退助の伝記等には信方の嫡子信憲が載つておらず、信方の子が正信であるかのような記載がされているものもありますが、これは祖父によると「信憲の事跡について憚りがあり伏せられてしまったためであろう」と申しておりました。

退助の伝記等に載る遠州掛川の時代に乾正信に仕えた老臣・北原羽左衛門と都築久太夫のうち、北原羽左衛門の名を世襲した北原家の歴代墓は、薊野の板垣家の歴代墓所の隣に現存しております。乾正信には実子が無く、山内刑部（永原一照）の次男正行（金右衛門）を養子として乾家を継がせました。乾正行には三人の息子があり、長男乾

正祐（與惣兵衛）の直系子孫が板垣退助で、次男乾正直（市郎兵衛）の直系子孫が乾正厚（乾正士の養父）にあたります。

乾退助が「板垣」に復姓した経緯は、世に言われているのは、乾正信以降「乾」の姓を称していたが、幕末鳥羽伏見の戦いの火蓋が切られ、土佐藩は迅衝隊を編成して高松・松山を鎮撫し、京都に登つて隊列を再編。この再編で退助は、東山道先鋒総督府の総督兼大隊司令に任せられ京都を出発します。この京都を出発した二月十四日が、先祖・板垣信方が、三百二十年前に信州上田原で討死した日にあたるため、信方の生まれ代わりのようにその武運にあやかろうと、先祖の所



縁の地・甲州勝沼への進撃に備えた美濃大垣で姓を乾から板垣に復したとのこと。この軍略上の理由による復姓により、戊辰戦争で大勝を得ましたが、退助は十世代に亘って使われた「乾」の姓が無くなるのを惜しんで、次男の正士を板垣の分家の乾市郎兵衛家の家督を継がせる形にして残したことです。

余談になりますが、乾正行の三男乾友正（源五郎）は、後継が無く一代で断絶しましたが、その二百九年後、退助は生後三ヶ月の五男の六に突然「乾源五郎家絶家再興」の届けを出させ、正士の時と同じように乾家を継がせて「乾六」と名乗らせます。しかし、これにはやはり少々無理があると感じたのか、「乾家は正士に継がせていいので良い」と感じたのか、最終的には六は板垣家の戸籍に戻り、大正七年に未婚のまま亡くなりました。家を「継ぐ・再興する」というのは、今までこそ封建的な考えのように思えますが、当時の感覚としては、祖名を大切にするのが常識的なことで、退助も板垣に復姓しながらも乾家のことにも配慮していた事になるのではないかと思います。

乾家を継いだ正士は、近衛兵として明治二十八年台湾に出兵、黄熱病に罹患して内地に帰還しました。その長男・一郎は、大正

十五年高知県立城東中学校を卒業。義兄（姉の夫）で廃娼運動家・川瀬徳太郎（ルーテル八幡教会創立者）の影響を受け、神学を修めて聖職者の道を歩もうと、東京の日本ルーテル神学専門学校に学び、牧師と教職の資格を得て、九州学院神学部に副牧師兼英語教師として赴任。その後、昭和十二年兵庫県の芦屋教会の牧師をしている時に支那事変が勃発。高知歩兵第四十四連隊に応召出征し羅店鎮の戦闘で負傷。上海の野戰病院で療養しておりました時、従軍記者らの取材を受け、当時の新聞に板垣の孫も武門の名に恥じぬ戦いをして戦傷した旨の記事が数回に亘つて掲載されました。そして戦傷により召集解除。復員後は牧師の職には戻らず、英語教師をしておりましたが、敵国語として英語が教えられなくなつた時期には、やむを得ずドイツ語を教えておりました。昭和十六年（一九四一）乾正士が大阪布施で他界。翌昭和十七年（一九四二）二月四日に板垣鉢太郎が逝去。この時、喪主板垣正貫さんから頂いた鉢太郎さんの葬儀の通知状がござりますので、祖父も参列したのではないかと思います。ところが同年の十一月二十六日には、板垣正貫さんも逝去され、本家・板垣家の家督は当時まだ三歳で幼少の退太郎さんが相続をされて今に至つております。

# 板垣退助のカリスマ性

板垣会副理事長 公文 豪

明治二十六年三月二十二日、自由党總理・板垣退助帰県の熱狂的歓迎は空前絶後、浦戸湾上の迎待船は二千余艘、その乗船者数千、参觀者は水陸共に万をもつて数えられると『自由党々報』が伝えていました。当時の高知県民にとって板垣がどのような存在であったか、それを知る手がかりが帰県のたびに繰り返される高知県民のこうした熱狂ぶりから浮かび上がります。

慶応三年五月、江戸遊学中の乾のもとへ出京を促す中岡の手紙が届きます。同月二十一日、京都の小松帶刀邸で中岡慎太郎、乾退助、谷干城、毛利恭助、西郷隆盛、小松帶刀、吉井幸輔の七名が会談、「薩土討幕の盟約」が結ばれました。これが土佐藩の上士、下士勤王派の反目を解消し、合流・結束する契機となるのです。大坂に下った乾は中岡の斡旋でアルミニーム三百挺を購入、江戸の山田喜久馬、小笠原謙吉、真辺戒作等に書を飛ばして帰国を命じます。一方、中岡も出京中の島村寿太郎、池知退藏、森助太郎、樋口真吉等を挙兵準備のため帰藩させ、郷の同志には書をもつて乾の麾下に入るよう勧告しました。土佐七郡の勤王党領袖は

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

板垣のカリスマ性確立は、文久三年八月、中岡慎太郎と中島町の乾邸で会見し肝胆相照らした事から始まります。当時、武市瑞山の一藩勤王の理想は、山内容堂の公武合体論の厚い壁に阻まれ実現不能の状態になりました。勤王への弾圧が始まると、藩の前途を見限った志士たちの脱藩が相次ぎます。中岡訪問の意図は、上士中の門閥家乾

士中の小笠原唯八、片岡健吉らを糾合します。ところが土佐藩庁は、討幕挙兵計画が進められているとは露知らず、帰国した乾を大監察に任じ、軍備總裁として兵制改革を行われます。勤王党の島村祐四郎はこれを聞き、「それは面白い。しつかりお遣りを願う」と大いに喜びました。乾を軍備總裁にするのは、泥棒に金庫番をさせるも当然で、彼等は京で火の手が挙がれば藩兵を率いて脱走することまで準備していました。

別撰隊を組織した乾は、旧来の弓鎗の兵制を銃隊編制することに力を注ぎます。隊長には「盛組さかんぐみ」中にて頭角を顯はしたる人物を挙げて之を用ひました（故片岡議長略伝）。別撰隊のみならず、次いで組織される迅衝隊の各隊長も、やはり盛組の中で士魂を發揮していた人々を配置したと思われます。盛組の切磋琢磨は軽視できません。

慶応四年一月、伏見の戦報が伝わると、乾は迅衝隊大隊司令として六百余の藩兵を率いて致道館を出発しました。片岡健吉は、郷士、庄屋、地下浪人、足軽、民兵等まで加わった迅衝隊を、「藩中の勤王家を以て組織したもので、所謂勤王同志隊」だと回顧しています。

一月十三日、朝廷から東山道先鋒総督兼

大隊司令を命ぜられた乾は藩兵を率いて京を発し、岐阜大垣で「板垣」と復姓。勝沼で近藤勇の軍を撃破した後、安塚、今市、白河、棚倉、本宮、一本松などを攻め上り、九月二十二日、一ヶ月の攻囲戦の末、会津を降伏に追い込みます。戊辰戦争最大の武功です。板垣が土佐藩兵一千人を率いて東京に凱旋し、鍛冶橋藩邸で山内容堂に謁した際、容堂は「今度は退助も誉めてやらずばなるまい」と戯れ、迅衝隊の軍令厳粛を激賞しました。

このように、幕末土佐藩における板垣退助の功績は、上士勤王派及び旧土佐勤王党を統率して藩の流れを武力倒幕へと転換させ、最終的に薩長土肥と呼ばれる地位に土佐を導いた点において絶大なものです。それは中岡慎太郎が構想した「板垣を盟主とする一藩勤王」の実現であり、その輝かしい成果でした。



明治二年、武功者への論功行賞で板垣に千石が下賜されました。これは西郷隆盛の二千石、大村益次郎の五百石に次ぎ、大山綱良の八百石、山縣有朋・前原一誠の六百石の上に出、その功績がいかに大きかつたかがわかります。

維新後の板垣は、薩摩・長州が天皇の権威を利用して「第一の足利」となることに極めて強い警戒心を持ち続けました。高知藩の兵制改革や金陵会議は、薩長が霸権争いを始めた時にこれを討つための備えでした。薩長への不信は、やがて藩閥専制政府の打倒、立憲政体樹立をめざす自由民権運動へと繋がっていきます。戊辰戦争で板垣の指揮に従った片岡健吉、山田平左衛門、谷重喜、平尾喜寿、かつて土佐勤王党に加わった西山志澄、島本仲道らが立志社幹部としてこれに従事しました。植木枝盛をはじめとする士族青年たちも結集してきます。

植木枝盛や中江兆民の思想がいかに先鋭であっても、組織的指導者として人々をまとめあげる役割を期待するのは無理です。この時代、巨大な国民運動を統率できる指導力をを持つ人物は、およそ板垣以外に考えることはできません。維新の元勲から自由の神へ。比類なきカリスマ性を發揮して、わが国を立憲国家へと導いた板垣の功績は、今日なお不滅のものと言えるでしょう。

# 板垣退助と明治十年の選択

高知市立自由民権記念館々長 松岡 健一

明治十年は、周知のとおり、士族の反乱としては最大の西南戦争のあつた年です。西郷の挙兵は、その影響に於いて他の士族の反乱と同日に論じられない。もしこの西郷の反乱に板垣が加わればどうなるかと、誰もが危惧しました。西郷と板垣は、それぞれ私学校と立志社という組織を持ち、その構成員の多くが近衛兵を脱隊した者でした。西郷軍にさえ手を焼いているのに、板垣軍が加われば、政府軍は正面作戦を強いられ、その勝敗は分からなくなるだけでなく、かりに勝敗に影響は少ないとしろ、より多くの犠牲は避けられない。万が一にも西郷・板垣軍が勝利したとしても、その結果どのような国家が建設されるのか不明でした。

多くの新聞は、明治八年の第二次民選議院論争、廃禄論争において、新しい時代は長い間士族に虐げられて来た人民の時代である、士族の精神は發揮されるたびに人民に迷惑をかける「有難迷惑ノ賜物」である、士族は人民からの「御情ノ仕送」によつて生きている「いそさん戸位素餐ノ徒」に過ぎない、その士族が今又、人民に感謝することなく、反乱することによつて人民に新たな負担を強いようとしている、と主張しました。

既に自由民権運動を開始している板垣にとつて、右の主張は無視できなかつた。その上、立志学舎で学ぶ若者たちが、今や武力シテ其挙動ハ立志社員ノ目的ニ係レリ、彼ノ

立志社ナル者ヲシテ果シテ眞面ノ民権論ナラシメバ、我ガ日本人民ノ幸福何ヲ以テ之ニ如カンヤ、若シ然ラスシテ一時ノ仮面ナラバ、日本人ノ禍害立ツテ待ツ可キナリ」と記しました。板垣が挙兵するなら、それは自由民権運動に期待する者に対する裏切りだと

いうのです。

多くの新聞は、明治八年の第二次民選議院論争、廃禄論争において、新しい時代は長い間士族に虐げられて来た人民の時代である、士族の精神は發揮されるたびに人民に迷惑をかける「有難迷惑ノ賜物」である、士族は人民からの「御情ノ仕送」によつて生きている「いそさん戸位素餐ノ徒」に過ぎない、その士族が今又、人民に感謝することなく、反乱することによつて人民に新たな負担を強いようとしている、と主張しました。

既に自由民権運動を開始している板垣は、否定すれば、林たちは板垣たちと関係なく挙兵計画をすすめるにちがいなかつ

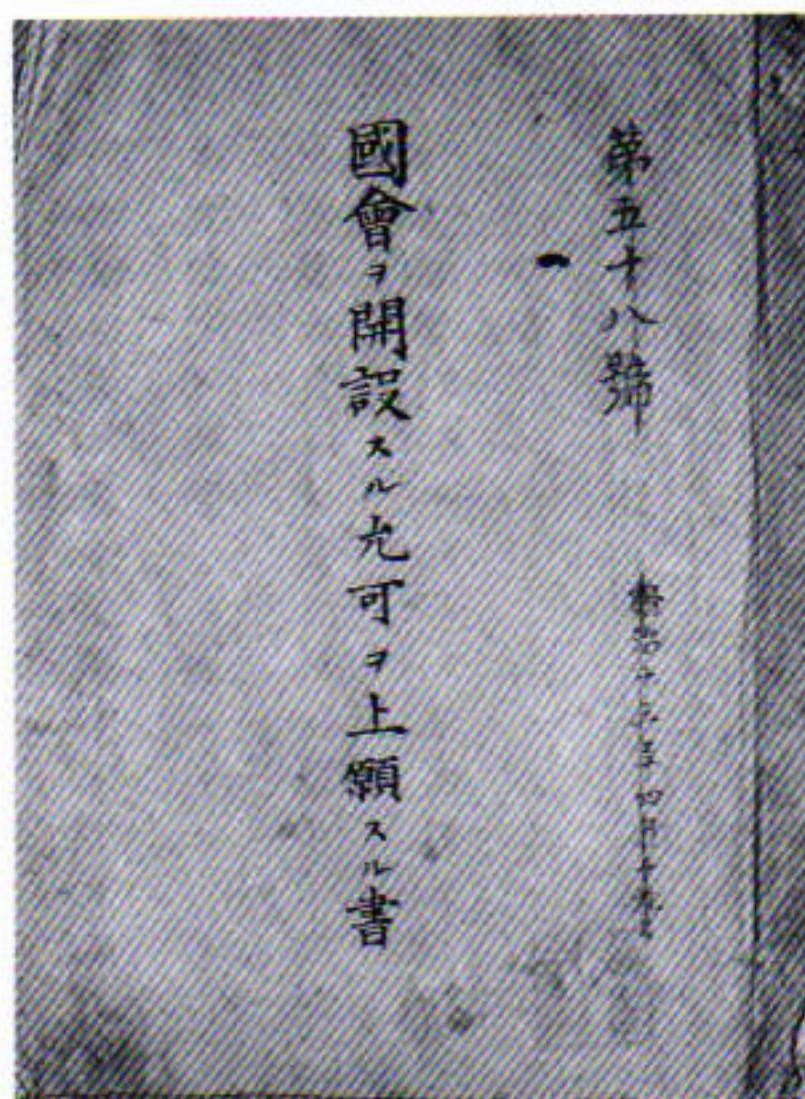
によつて世の中を変革する時代でなく、言論によって改革すべきであると主張し始めました。かれらは芝居小屋で政談演説会を開き、また機関紙『海南新語』第五号の「明治第二ノ改革ヲ希望スル論」は、明治第一の改革は「政府ト政府ノ変換、即治者ノミノ関係」に過ぎず、虐げられていた人民はいさかも解放されなかつた、いま必要な改革は「政府ノ独裁ヲ廢シテ人民ヲシテ政権ヲ掌ラシム」、すなわち普通の人が主人公である国家の建設であると主張し始めたのです。

板垣は秘密会議に出席して林有造が語る挙兵計画を聞きながら、皆で挙兵するには銃が三千丁ほど必要だが、そのための資金をどうする、と林に問いました。林は白髮山の金（一種の士族授産金）を宛てると答え、上京して大蔵卿大隈重信に白髮山の金の下付を要請しました。しかし金は下付されないまま時間が過ぎ、その間に西郷軍が壊滅状態になりました。そして板垣を除く土佐の幹部たちは、「立志社の獄」により全て逮捕されました。かくして土佐の若手民権家たちは、板垣の許可さえあれば自由に言論闘争ができるようになりました。

板垣が林の挙兵計画を否定しなかつたのは、否定すれば、林たちは板垣たちと関係なく挙兵計画をすすめるにちがいなかつ

たからでしょう。そうなれば自由民権運動も成り立ちません。

討幕雄藩といえど薩長土肥であり、当然明治新政府は薩長土肥の有司によつて構成されました。そして新政府の最初の仕事は



士族の解体でした。討幕雄藩の士族たちにとつて、こんなことになるとは思つてもいなかつた。士族の反乱が討幕雄藩にほぼ集中するのはこのためです。明治七年二月には佐賀の乱(江藤新平・肥)、明治九年十月には萩の乱(前原一誠・長)、明治十年二十九月には西南戦争(西郷隆盛・薩)。討幕雄藩の中で土佐だけがほぼ無傷で残りました。そして反乱せんとするエネルギーが自由民権運動に吸収されていきました。

土佐が挙兵しなかつたのは 板垣の判断に負うところが大であると思います。あの時板垣が挙兵に舵かじをきいていれば、土佐が自由

民権運動のメッカと言わることはなかつたでしょうし、そもそも土佐の前途有為の若者たちが百人単位、千人単位で死んだと思います。そうすればその後の土佐の歴史は全く異なつたものになつたでしょう。政治分野はもとより、牧野富太郎も、浜口雄幸も、幸徳秋水も世に出なかつたかも知れない。そう考えれば、明治十年の板垣の選択はもう少し光があてられてもいいのではないでしょうか。

## 清貧の理想家——板垣退助——

板垣会理事 谷 是

で、他にも永年、日本国のお札に使用されたことは周知のことである。あの髭があるから偽札が造りにくいためだと言われましたが、国民挙げての「敬愛尊崇」の念が消えるものではなかつた。

板垣退助といえば、歴史上の人物として、土佐では最も尊崇された人物であった。銅像にしても高知公園追手門内を始め、岐阜市岐阜公園、国会議事堂、青梅市釜ヶ淵公園、日光市上鉢石町神橋西詰など数体あ

るし、制作者も濱口青果、柴田佳石、北村西望、松野伍秀、本山白雲といずれもかなりの優作であつて、感銘を与えるものである。当時の人々は、功績を讃え、風貌を後世に残そ

うと、広く淨財運動を起こし建立したもの



晩年の板垣退助

その草稿は数ヶ所に散逸され、一時は行方不明となり「幻の原稿」と言っていた。あれを何とか探し出して活字化したいと高知の識者達は考えたし、高知新聞の名コラムニスト中島三村（及翁）なども訴えていた、土佐史の難問の一つであった。

それを補うものとして、史家平尾道雄が、高知新聞紙上に『無形板垣退助』を連載し、昭和四十九年四月、同社から単行本として発刊したが、これは板垣の全貌を知る貴い著作であった。しかも各行間に『平尾史学』といわれる鋭い史眼が光つており、今でも恩にあずかることが多い。素人でもわかりやすく板垣が理解できる唯一の好著であった。

その後も宇田の草稿は依然として行方不明が続いたが、本会の役員である公文豪氏の飽くなき探求により全稿が発見され、同氏の情熱と刻苦により翻字され『板垣退助君伝記』として先年発刊されたことは、土佐史研究の慶事として記憶に新しいところであ

る。泉下の宇田翁が、いかに喜んだか、思つても胸が打たれる快事であった。

### 暴れん坊の悪童

青少年期の退助というのは、手もつけられない悪童であつたことは良く知られている。相撲を好み、鶏犬を闘わし、勝負事を好んだ。家中の青年達が居住区によつて士魂を練るたるめ造つた結社「盛組」の一方の巨魁で、退助は猪之助であるので「いのす」、後藤象二郎は保弥太から「やす」と呼んだ仲であった。土佐の江戸期には「衆道」、すなわち美少年を愛する蛮風が濃厚に残つており、俗に「トント」と言つた。薩摩や肥後辺りでも同様であつたらしい。「乱暴狼藉」というが、土佐では「乱暴とは女性を犯すこと」を意味し、「狼藉とは男性を犯すこと」だと、平尾道雄氏より直話で聞いたことがある。血気盛んな退助などは、両方をやつたらしく悍馬のような青年であった。そのため何度も罰をこうむり、嘉永四（一八五二）年十二月を始め、安政元（一八五四）年八月には「惣領職没収、城下四ヶ村禁足」などの処分を受けている。これは高知城下と近郊の潮江、下知、江ノ口、小高坂村に足を踏み込むことを禁ぜられたもので、退助二十歳。四年間謫居生活をおくつていた神田村には、「乾左右衛門・九拾

九石武升武合」の所領があつたとされているから、一族の領地もあつたであろう。

この時期、謫居地と伝聞のある場所から道を隔てた近隣地に、岩崎弥太郎も半年ばかり罪を得て居留していた。岩崎は一介の地下浪人の青年で、二人の間には何の交渉もなかつたであろうが、後世、日本的な仕事をする青年一人が、狭い神田の地に不遇な生活をしていたことも興味深い。

少年期の退助は学問に精を出さず、徳永千規（達助）が家庭教師を頼まれて乾家へ行つて教授しようとしたが、退助は聴講のときでも袴をはかず、着流しの姿で机の前に座り込み、家僕に扇で風を送らすという搭配で、師弟の礼を知らない。ついに千規は怒つて、以後、乾の家には行かなかつたという伝聞がある。好学の少年ではなかつたであろう。しかし、武芸は熱心で、兵法書『孫子』などは熱心に読み続けていたというから、兵書は相当に勉強していたのではなかろうか。神田村の謫居時代の生活はどうであつたか、資料は乏しいが、私は相当兵学はやつていたのではないかと想像している。

### 無欲な無骨さ

山内容堂や吉田東洋も「困った奴だ」と思つていたようだが、罪がとけると一躍抜擢



堅持し、蓄財などはもとより考えもせぬ、古武士的な清貧さを貫き通した生涯と言えよう。政界を引退した後でも社会改良会なるものを立ち上げ、四民平等の理念や女子同情会を主張するなど、あるべき日本民族の姿を希求し続けた理想家肌の人であった。

### 自己即國家

近年、板垣退助の洋行経費の出処だけを取り上げて、彼の全政治活動を否定する学者や研究者も多い。たしかに伊藤博文、井上馨らの為政者側は、後藤象二郎、蜂須賀茂韶らに働きかけ、板垣を外国に出す事により自由民権運動を鎮静化させようという策謀であった。現在、洋行費が三井家から出たことは明白になっている。そのため、馬場辰猪、末広鉄腸、大石正巳らの自由党離脱を生み、党が壊滅する一因ともなったが、板垣自身も方々で起こる自由党一派の一揆、騒動に嫌気がさしたものも事実であった。本来、騒動はもう起きたくないという淡白な性格にもよることだったのであろう。板垣にしてみれば、今まで再三、外遊の機会はあった。しかし、国家建設途上にあつた当時の政府は「いま板垣に外遊してもらつたら困る」として沙汰止みにすることが多かつた。板垣としては、「自分がこの目でヨーロッパ各国の実情

を見ることが、日本国のためになることだ」との一念が強かつた。事実、パリではクレマンソーや文豪ビクトル・ユーゴーと会談するなど、相当に勉強している。「國家即自己」の情熱と信念は、板垣外遊にも当然言える行動であった。その点、彼も「時代の人であり、矛盾の多い人」でもあった。

し、「江戸留守内用役」となつた。激しい尊王攘夷を打つ退助に、いささか辟易したこともあつたというが、その気性の強さに「あれは使える時が来る、戦時には役立つ男だ」と思われていたのであろう。果たせるかな戊辰の役が始まると「さあ、お前の出番だ」とばかり、六〇〇の郷士を中心とした迅衝大隊司令を命ぜられ、大雪の四国山脈を越えて、丸亀、高松の開城に向つて行軍するが、以後の一軍の将としての才能と統率力は見事なもので、「軍略家」の名声は西郷隆盛も認める程であった。

大村益次郎、西郷に伍して板垣は武人としての名声を博するが、後年、自由民権運動の先駆者として、大衆を率いて社会改革の先頭に立つ退助は「政治的軍人」としての風貌を持ち続けた人ではなかつたか。党利党略に長けた、利害を念頭に忘れぬ政略的政治家ではなく、軍人らしい朴訥さと一徹さを

は、「私には土佐の先人は誇らしい。長州の伊藤博文、井上馨、品川弥二郎、山縣有朋などと違い、無欲で至純なところがうれしい。嫌らしいところは、少しもない。自己即国家という気持で、国家国民のために、命を捧げている。その無私無欲が美しい」といつも言っていたが、板垣などはその典型ではなかろうか。

無骨であり、一途さがある。自由民権運動の象徴として祭り上げられたが、国家の建設がなされた後には、西郷と共に無能的政治家として評されることもある。しかし、こういう人材がいたからこそ、維新の武力闘争も、その後の民権運動も推進できたのだ。維新の革命は、坂本龍馬らの志士活動だけではない。その理想を、実際上、仕上げていったのは板垣の無私な政治活動と情熱であった。そこをもつと考えてもらいたい。

今日の日本では、自由や人権は憲法で保

障されている。国民の認識は、空気のように見えにくく、当然のことのように思っている人が多い。しかし、今も世界には自由や人権もない、戦争状態や専制君主のような人間

が君臨している国家体制の国も多い。私たち日本人の先達が、百五十年前からこの問題と真剣に取り組み、命がけに闘った事実は「一種の奇跡」と言えるかも知れない。先人

の恩恵が今日も生きているということを、今の日本人はもっと認識すべきではないか。板垣などが目指した原点を忘れてはいけないと、あえて言いたい所以である。

## 板垣退助と天神橋通商店街

天神橋通商店街 小笠原 健一

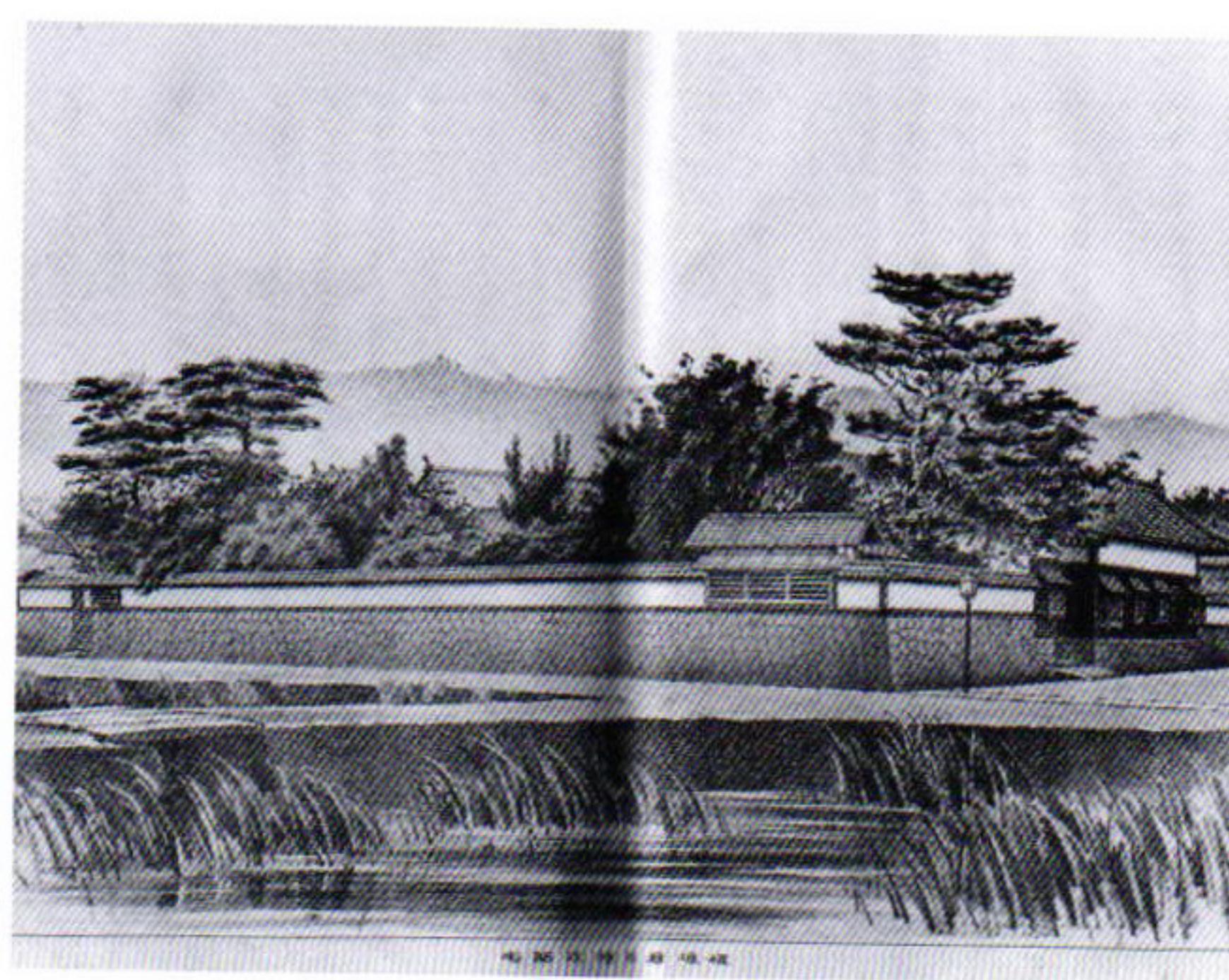
昭和三十年当時、我々子供の遊び場は板垣退助の生誕地である高野寺の庭でした。寺の住職に怒られながらも庭の真ん中にある板垣退助の石碑に上がつたものでした。

その頃の我々わんぱく坊主には、あの板垣退助が百円札のみならず、昭和二十三年に発行された五十銭札の肖像画にもなったほどの人物の記念碑であつたことを、理解しようとするとする器ができあがつてゐるはずもありませんでした。

講演会に参加した多くの商店主の板垣退助に関する知識は、我が街の出身であることや自由民権運動家、政治家そして岐阜での傷害事件時の「板垣死すとも自由は死せず」の名言くらいのものでしたが、この講義でたくさんの退助を学びました。

そこで、我々のこの商店街を「板垣退助の生まれた街」として板垣退助の生誕祭を毎年五月二十一日に開催することとしました。

この生誕祭を行うにあたつて、公文豪先生に教えていただいた薊野にある板垣家の墓に話し合う中で、高知市の商工労政課の紹介で、高知市内の商店街の改築と同時に商店街の名称を南大橋通りから天神橋通に変更しました。これを機会に、商店街の活性化を話し合う中で、高知市の商工労政課の紹



揚を図る効果と、板垣退助の顕彰を兼ねた  
促販事業として定着しつつあります。

この事業の目玉として、商品を買っていた  
だいたお客様へのお釣りを、一枚のみ板垣退  
助の百円札にしようという趣旨から、毎回イ  
ンターネットの新札購入オークションに応札  
し、購入した新札を会員商店主に百枚割当  
てています。

このアイデアが予想を上回る好評を得て、  
多くの店に行列ができるほどの盛況にあり  
ます。加えて、こうした毎年の生誕祭には、  
テレビや新聞のメディアが報道してくれるこ  
とで土佐の板垣退助の名を世に広めてくれ  
る良い機会となつていると同時に、何と言つて

も商店街の活性化に大きく寄与してくれて  
いる展開となっています。  
昨年は、NHKの全国放送を見た大阪の方  
から百円札を期待してのお菓子の注文  
があつたり、また、北海道の方からは両親が  
集めていたという三十枚もの百円札を商店  
街で活用してほしいと高知市の総務課宛に  
送つてくれたという有難く、うれしい反応も  
ありました。

我々商店街の会員は、この地に生まれ育つた  
板垣退助の偉大さをこの事業を通じて知り、  
誇りに思っています。板垣退助を広く県民市  
民を始め、全国の人々に知って頂けることを願つ  
て、さらに努力を重ねる所存であります。

## 「福島の戊辰戦跡と自由民権の旅」 五十年ぶりに板垣の銅像に再会

高知市立自由民権記念館友の会会長 岡林 登志郎

### 板垣と河野広中の出会い

会長、自由民権記念館友の会幹事)。裏磐梯  
や日光の秋の紅葉を楽しみながら、土佐藩  
迅衝隊の進軍コースを見学してきました。

最初の目的地は、三春町歴史民俗博物館  
内にある「自由民権記念館」。

記念館では、三春町歴史民俗資料館元館  
長の佐久間真さん(三春町自由民権血縁の  
会会員、福島自由民権大学会員)と公文さ  
んが、展示資料を示しながら「板垣退助と  
高知市立自由民権記念館友の会は、昨年  
十月二十四日(金)から二十七日(月)の三泊  
四日で「福島の戊辰戦跡と自由民権の旅」  
を企画し、福島から日光を訪ねました。  
旅の案内役は、公文豪さん(板垣会副理事  
長、高知近代史研究会会长、土佐史談会副



河野広中の三春開城の時の出会い」や、その後の河野の来高、弘瀬重正・西原清東の三春正道館への教授としての赴任、そして二人が滯在を終わり帰高すると、三春の民権青年三人が一人を追つて来高するなど高知と立志社との交流等についての説明や、「河野たちの活動は、我国最初の政党『自由党』の結成に代表を送るなど、積極的に党の活動に関わった。こうした動きに対し、福島県令に着任した三島通庸は、明治政府の力を背景として明治十五年の喜多方事件を好機として河野広中ら三春町出身者十名を含む五十八名の運動家を逮捕するという大弾圧を行なった。この福島事件以後、自由民権運動は全国的に激化し、明治十七年の加波山事件に繋がっていく。今年が加波山事件百三十周年となる」等興味ある説明をしてくれました。

### 三春の人々に愛されている美正貫一郎の頌徳碑

博物館のすぐ裏手には、土佐藩兵の美正貫一郎（迅衝隊一番隊司令、浪士掛探索役、断金隊長）の頌徳碑がありました。

公文さんが「美正の尽力で三春藩の無血開城が実現したことなどから、彼の徳を慕う人々から三春滞留を求められるが、二本



松攻略に向かう。しかし、彼はその途中の阿武隈川を渡る際、銃弾にあたつて戦死した」が、「三春の人々は、美正の死を悼み、並松坂に美正神社を建立したが廃社となつた。戊辰戦争百二十年の昭和六十三年、美正の遺徳を偲び、この碑を建て、美正腰掛石を傍らに移した」（頌徳碑文）ことなど、美正が三春の人々に今なお愛されていることなどを話してくれました。

### 二本松少年隊の悲劇を初めて知る

次の二本松市では、自由民権運動家・衆議院議員平島松尾顕彰会会長の小島喜一さん、郷土史研究家の大友秀夫さん等地元の方四人の歓迎を受け、戊辰戦争での悲劇のひとつ二本松少年隊のお話を、少年隊が祀られている大隣寺の一角で聞きました。

### 土佐藩士の墓に板垣饅頭をお供えする

土佐藩士墓所のある融通寺（会津若

年齢は十二歳」であったこと等の説明とともに、当日配布された資料（郷土史家・紺野庫治著『二本松少年隊の記録』より『岡山篤次郎と土佐藩士』という抜き刷り）をもとに「突如、後方（薩州兵）から銃声があつて：二階堂衛守と岡山篤次郎の両名は倒れた。篤次郎は即死、篤次郎は瀕死の重傷を負つた：少年達が振りかえつて銃声の方を見たところ、後方を追つて来た西兵（土州兵）は立ち止まって追い払うような招くような手振りで合図を送つていた。そして、銃口を空に向けて発射した」。その後、篤次郎は西兵により野戦病院に入れられるが没する。「西軍の隊長は篤次郎の最後に感激して、反感状（感功）をほめて与える書、反感状（敵に与える感状）を与え、看護婦に『篤次郎の最期を遺族に良く伝えよ』と言い残して：」「噂話のようなものだが、反感状を出してくれたのは、土佐藩の広田弘道と言う人で、この話を伝えてくれたのは、安積開墾に当たつた旧土佐藩士南部宗長という人物で、この人も篤次郎を介抱した事を話したと伝えられている」等説明してくれましたが、初めて聞く話でした。

（松市）では、公文さんの説明で、土佐藩兵四十九人の戦没者が眠っていることや、「野根山騒動で二十三士を処罰した時の責任者大監察小笠原唯八（牧野群馬）が砲弾を受けて戦死しているが、彼はこの騒動の時の心の傷をもち、死に場所を探していたのではないか」「吉田東洋を暗殺した安岡嘉助の兄・安岡覚之助の墓がある」など興味がわく話をしてくれました。お墓に、高知から持参した天神橋商店街の板垣がんこ饅頭をお供えしました。

## 戊辰戦争のオールスターが揃った母成峠の戦い

旅の三日目は会津戦跡を訪ねました。白虎隊の墓所、会津若松城、白虎隊と西軍の激突地・戸の口古戦場跡と十六橋、続いて「母成峠古戦場跡」を見学しました。

公文さんが、大きな碑を見上げながら「見て下さい。この時期のオールスターがこの母成峠の戦いに勢揃いしていますよ」。確かに、碑の横面には「東軍 大鳥圭介、田中源之助、丹羽丹波、土方歳三他八百名。西軍 板垣退助、伊地知正治、谷干城、川村純義以下三千名」と名前が彫られていました。



まず公文さんが、「ここ母成峠は、会津若松への侵入口の一つであった。西軍がどこから攻めてくるか、城を守る会津側にとつても重大な問題であったが、攻める西軍側にも議論があり、薩摩の伊知地正治が母成峠から猪苗代を経るコース、慎重を期す土佐の板垣退助は御靈権峠から中地三代を経由して会津に至る湖南コースを主張した。両者讓らず、結局両道からの二方面攻撃に決したが、兵力分散を心配した長州藩の調停で、母成峠を攻めることに絞られる。一方、会津側守備隊も兵力分散を強いられることになる。八月二十一日、西軍は薩摩、土佐を主力とし長州外六藩で構成された二千二百人。

会津藩外幕府側の守備隊は新選組外総勢八百人だった。濃霧の中の戦いは七時間に及び、午後四時過ぎにほぼ勝敗は決した」と説明してくれる。

討幕運動から自由民権運動、それぞれの場面で先頭に立った板垣退助という人物を少しずつ知りたいと感じています。（旅の中で、板垣に関わる場面のみ記録しました）

**日光では板垣退助の銅像に「再会」**  
旅の最終日は日光の見学。

中善寺湖畔の華厳の滝を見学した後で、

私にとっては約五十年ぶりの板垣退助の銅像とご対面でした。日光東照宮を兵火から守ったという功績で建立された板垣退助の銅像。初めて銅像が記憶に残ったのは高校卒業の年。「なんでこんな所に板垣の銅像があるのだろう」と思ったものでした。私にとっては高知城の銅像しか知らなかつた時代です。



## 特定非営利活動法人板垣会

この法人は、故板垣退助先生の遺徳を顕彰し、自由民権思想の拡充徹底に努め民主的文化国家の実現に寄与することを目的とする。

この法人は、上記の目的を達成するため、次の種類の特定非営利活動を行う。

- (一) 社会教育の推進を図る活動
- (二) 観光の振興を図る活動
- (三) 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動
- (四) 環境の保全を図る活動
- (五) 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

この法人は、上記の目的を達成するため、次の事業を行う。

### (一) 特定非営利活動に係る事業

- ① 板垣退助及び板垣を中心とする自由民権運動の出版事業の立案及び支援
- ② 板垣退助、自由民権運動の講演会、展示会の開催及び支援
- ③ 板垣退助銅像の保全、清掃や墓地清掃、没日供養
- ④ 板垣及び自由民権関係の史跡巡り及び市民への啓蒙活動
- ⑤ 板垣及び自由民権運動のドラマ化、映像化への働きかけ
- ⑥ 板垣の紙幣及び切手化への働きかけ
- ⑦ 板垣退助祭の開催及び支援
- ⑧ 板垣の生誕、没年、その他業績時の記念事業の検討及び企画立案、全国にわたる板垣の足跡ツアーリンクの計画実施

### ◆役員

理事長	古谷 俊夫
副理事長	北代 嶽雄
理事	谷 是
山北 忠彦	
谷相 勝二	
小笠原健一	
公文 豪	
松岡 健一	
岡林登志郎	

### ◆板垣退助96回忌法要のご案内◆

板垣退助は、大正8(1919)年7月16日、83歳の生涯を終えました。板垣会は、毎年命日に、生誕地である高野寺で法要を行っています。

今年も、例年通り、以下の日程で96回忌法要を執り行います。当日は、平服で結構ですので、多数の方がご列席下さいようお知らせします。

- とき 7月16日 午後3時から
- ところ 高知市中島町 高野寺

終了後、高野寺で板垣会総会。のち、サンライズホテルで懇親会を開催します。(会費 3,000円)

- 2015年4月10日 発行
- 発行者 古谷 俊夫
- 発行所 高知市本町2-2-31
- 特定非営利活動法人 板垣会
- TEL (0887) 55-2860

### 板垣会々員募集

年会費 2,000円  
板垣退助顕彰に御協力を!  
入会は別途振込用紙をご利用ください。

会議・宴会・祝事・祭事・法要等にご利用いただける  
多目的ホール・座敷 各種会場を完備

観光・ビジネス・スポーツ合宿等 目的に合わせてご宿泊可能

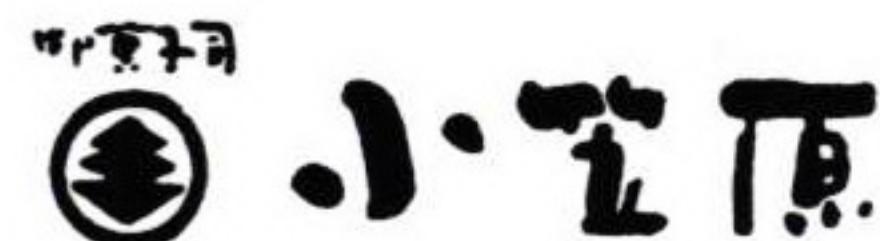


ひときわ輝くおもてなし

# 高知 サンライズ ホテル

[www.kochi-sunrise.com](http://www.kochi-sunrise.com)

〒780-0870 高知市本町 2 丁目 2-31 Tel 088-822-1281



高知市本町3丁目4-6  
TEL 088-875-2430

明治維新、自由民権運動の主導者としてがんこなまでに民主化  
を進めた板垣の意思をがんこまんじゅうにたくしました。